

萩にあしあと残そうよ

「まなび欲が出てきた」

令和2年(2020)
3月1日発行
—第4号—



暖冬の影響もあり、河津桜が
早々に満開に。(2/15)

「日々の暮らし」

元来、休みの日にゴロゴロ過ごすのは苦手な性分ですが、生活サイクルが安定してきたことで「いかに有意義に過ごすか？」を考えるようになりました。そこで、市報やSNSなどから情報を仕入れ、行事や講座に顔を出すことから行動開始です。梅や桜とともにまなび欲も開花ですね。

二月一七日に、萩市内について初雪が舞いました。積雪にはならず：果たして二度目はあるのかな？



道がえし（ちがえし）という
演目。迫力があります。

「あしあとノート」

◆節分祭と奉納神楽◆

二月三日夕方から、春日神社で節分祭があるという情報を得て足を運びました。茅の輪くぐりやどんど焼きに次々に人が訪れていました。

私の目的は、境内の阿武神社で奉納される長州神楽田原保存会（市内弥富地区）による石見神楽の鑑賞です。次々と上演される演目の内容はもちろんですが、毎回同じ人が衣装を着替えて登場し、少数で懸命に伝承する姿にも胸打られました。

◆毛利輝元の墓参り◆

毛利輝元は関ヶ原の合戦で徳川に敗れ、本拠地の広島を追われ萩を開府しました。ここには輝元の没後菩提寺として天樹院が建てられました。

たが廃寺となり、現在は墓所のみが残っています。輝元の墓は高さ二・一メートル、夫人の墓は一・八メートルの大きなもの。ずっと素通りしていたことを詫びつつ手を合わしました。



◆防災青年団集会◆

仲間に入れてもらった防災青年団のいわゆる総会に出席しました。重要な話は少々、その後は飲み会です。話題の内容がつかめるようになってきて、この集まりでの面白みが増してきました。五月三日に三島神社例祭、八月一日に椿八幡宮例祭などが行われます。

◆鹿児島旅行が実現◆

二月二日から二泊三日で鹿児島旅行に出かけました。鹿児島旅行に出かけました。新幹線で鹿児島中央駅まで移動し、宮崎市に住む友人の車で知覧・指宿・鹿児島を巡りました。旅の詳細は別途編集しますのでお楽しみに。ちなみに、新山口駅と鹿児島中央駅とは、たった約二時間で結ばれています。近い！

「自由気ままな歌日記」

酒好きの

口に蓋することできぬ
盃を干しつがれりや嬉し
(一月一九日・父へ)

お茶殻を

ふりかけにする方法を
調べて試し部屋はかぐわし
(二月二七日)

脅かしのつもり

微塵もなしといえ
わが足音に鴨が飛び出す
(二月八日・ランニング)

梅椿河津桜の咲く萩に

初雪の舞う朝となりけり
(二月一七日)

「仕事はどうだい？」

岸田商会は柑橘類の搾り汁（ぼん酢）を製造する会社です。このうち、萩の特産品でもある夏みかんについては、二月に契約農家に収穫と袋詰めをしてお願いいただき、男性社員総出で一日をかけ一斉に集める作業をします。

袋にぎつしりと詰め込まれた夏みかんは重さが二十から二五キロもあり、大量の袋を積んだり降ろしたりし続けることにより、ご想像のとおり体のあちこちが筋肉痛になりました。（食用としての収穫時期は五月から六月）



駐車場に並ぶ夏みかんの袋、
ひと山18袋積みです。

チョンマゲビールの営業はやはりコツコツと。道の駅や宿泊施設で新規が取れ、少しは会社の役に立っているのかなと思うこの頃です。

「ま・な・び」の記録」

『古式捕鯨の里・通（かよい）』

「かつて古式捕鯨で栄えた長門市通（かよい）地区に観光汽船で訪れて鯨に感謝する文化を知る」という告知に強い興味を持ちました。

ガイドの引率と説明がセツトになった特別企画：実は、志のある仲間が集まって立ち上げた会社が、青海島観光汽船の協力を得て初開催したモニターツアーだったのです。

ちなみに、通（かよい）という地名は、青海島の先端にあるこの場所に、三隅地域の人々が船で通って漁をしていたからという説明でした。最盛期には四千人を超えた人口も、現在は一千人余だとか。

例年になく暖かさといえ、冬の山陰地方特有の、雲が多く季節風の強い日が続く中、この日は地元の人々が驚くほどの青空と穏やかな海に歓迎されました。閑散期かつ告知が行き渡っていないツアーというところもあって、参加者一人

の貸し切りツアーでした。

仙崎港から通漁港までの片道約十五分の船旅は、周囲の景色を楽しみながら、ベタ風の海上を独り占めです。

通漁港で白いジャンパー姿の男性が迎えてくれました。青海島ボランティアガイドは、平成十八年に設立されたガイド会で、くじら資料館や鯨墓を中心に、漁港町らしい佇まいの通地区を案内しています。現在、活動しているガイドは五名程度とのことで、それぞれ仕事等の都合があることから、彼がガイドをする機会がもつとも多いのだとか。

◆くじら資料館

通浦では江戸時代の延宝元年（一六七三）に「鯨組」という大規模な捕鯨組織を形成し、十一月から四月にかけて出産と育児のために日本海沿岸を南下してくる鯨を捕獲していました。沿岸近くを回遊する鯨を網で囲み、舳で突きとる「網取り法」という方法で、幕末期の資料では計二四艘で総乗組員二五五人もの規模であったとか。この資料館には、国指定重要有形民俗文化財に指定された捕鯨用具が展示されています。戦時中の鉄の供出を免れて現存しているものは唯一これらのものというとても貴重な史料です。

◆青海島鯨墓

捕獲した母鯨を解体したときに出た胎児を弔うために、元禄五年（一六九二）に、鯨組の網頭たちが願主となり墓が建てられました。墓の背後には二百年以上にわたり明治時代まで葬られた鯨の胎児七十数頭が眠っています。母鯨を捕らえることにより命を落とすことになった胎児への哀れみを墓という形で供養している通の人々の情の深さを感じる場所です。



◆段町の波止場

元禄年間（一六八八〜一七〇三）、鯨網に苔が付着して打ち込むのが難しいため、苔を

落とすために築造された波止場で、通で最初に築造された防波堤です。城の石垣と同様に、実に美しく石が積み上げられています。

◆海雲山般若院向岸寺

応永八年（一四〇二）、西福禅寺という禅宗寺院として開創、天文七年（一五三八）、浄土宗忠譽上人によって再興されたそうです。ここでは本堂に上がり、なんと住職から直々にお話をいただきました。本堂の一隅にソファが置かれ、資料が掲示されていて、鯨墓が建てられた経緯や墓石に刻まれた文字の意味、弔った鯨の戒名が記された過去帳などの説明によって、人々が鯨に寄せた思いを強く感じることとなりました。そして最後に、鯨位牌に合掌させていただきました。

感想その他

まだ、試験的な取り組みの段階ということで、ツアーとして完成されたものではないのですが、「鯨文化」というテーマが凝縮した魅力的な内容でした。



写真は帰路。
後方に通の集落が見えます。

島の沿岸部の限られた部分に家並が密集する漁師町で、普通自動車が入れない狭い路地や坂道などの風情がこの上なく良いものに思えます。こういう土地こそ訪れる価値がある、ただしぞろぞろと人が歩いていては雰囲気が出ない。人口が減少し、高齢者が多いという地方共通の問題を抱える中、漁業に頼ることから脱却する一手を模索している（株）EVAH（主催者）の吉見さんの思いも伺うことができ、有意義でした。

最後に、漁師町ならではの味の体験を組み込めたら、参加動機や満足感につながると思いますというエールを送り、今後への期待とお礼を伝えて解散となりました。